

2024年度 学校教育自己診断 分析

1. 生徒

- ・肯定的評価が大きく低下している項目はなかった。概ね、本校の教育活動が肯定的に受け止められていると考えられる。
- ・学校へ行くことや、自分の学級、授業が楽しい、実習、校外学習の充実、また、先生の指導に納得できる等の項目で、肯定的評価が向上している。中学生生活や小学校高学年をコロナ禍で過ごした生徒たちが、生き生きと高校生活を送れるようになったことが要因の一つと考える。
- ・生き方、社会のルール、人権、進路について考える機会についても向上している。総合的な探究の時間が始まり6年、新教育課程になり3年が経ち、本校の「探究」等の取り組みが成果を出していると考えられる。
- ・ホームルーム活動、行事、生徒会活動、地域活動等の項目の向上も、「アフターコロナ」「探究」等の取り組みの成果と考える。

2. 保護者

- ・生徒と同様に、学校へ行くことが楽しい、また、教育方針への理解、教職員との意思疎通、行事への参加等の項目で、肯定的評価が向上している。コロナの終息に伴い、保護者と学校の意思疎通の充実等が進んでいることが要因の一つと考える。
- ・一方、授業の理解、生徒指導、いじめ対応についての評価が下がっている。これらの項目は、すべての保護者が、ご自身のお子さんが生徒指導やいじめの対象となった経験をもとに回答されているわけではないと思われる。イメージや、中学校の指導との差から感じられて、回答されている部分もあると思われる。したがって、本校の指導や、中学校と高校の生徒の発達段階に応じた指導の際など、ご理解いただけるよう情報発信に努めなければならない。

3. 教職員

- ・新教育課程、観点別評価、ICTの活用等が、3年経ち、一定の成果が出つつあるため、教科を超えての議論、指導方法の検討、次年度への検討、研修等の項目は降下していると思われる。
- ・一方、日常的な議論や相談の項目は向上している。また、他機関と連携の項目も増えている。背景には、多様な生徒の対応に追われているという面もあると考えられる。
- ・ICTの活用が低下するも、個人情報管理については、向上している。この数年間のICT推進の取り組みが進み、落ち着いてきていると考える。
- ・校務分掌や学年間の連携等の項目は降下している。ここ数年で、新教育課程以降、観点別評価、ICT化、大学入試等の改革、生徒指導要綱の改訂等の教育に関する変化が多くあったため多忙を極めている。また、募集人員の変化による教員定数の変化も続いている。業務の効率化、見直しの取り組みが引き続き必要と考える。
- ・教職員の「働き方改革」の取り組みが進み、勤務時間外労働の抑制が進んだため、行事への取り組み、ホームルーム活動への取り組み、部活動活性化の取り組み、校内清掃等の項目の降下は、予想されたことでもあり、致し方ない面もある。ただ、生徒の、行事、部活動、ホームルーム活動等の項目の降下が見られないことを鑑みると、生徒には受け入れられているものと考えられる。